

Youth Post

有始有終

2026
vol.

1

111巻第1号 発行2026年2月1日

編集・発行 日本青年団協議会

〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階

TEL 03-6452-9025 FAX 03-6452-9026

MAIL dan_news@dan.or.jp

Web <https://www.dan.or.jp/>



INFORMATION

日本青年団協議会の最新情報はここから



子どもによる企画の数々だけでなく、
振る舞われるディナーもクリスマス会の
楽しみ
(島根県隠岐郡知夫村)

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）とPost・ポスト（郵便物）を組み合わせせたものです。

本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

島の子どもたちに夢と笑顔を

途絶えたクリスマス会、青年団が復活（島根県隠岐郡知夫村）

去る12月21日、島根県知夫村の知夫里島開発総合センターで、知夫村青年団（以下、青年団）主催のクリスマス会が開催された。人口569名の島で子どもとその保護者ら約100名が参加し、会場はあたたかな空気と笑い声に包まれた。

◆手づくりの企画が

参加者を迎える

会のプログラムは多岐にわたった。島の音楽好きが集う軽音部の演奏を皮切りに、小学生や高校



島のイベントで引っ張りだこのデュオ

◆「途絶えさせたくない」復活への想い

コロナ禍以前、島内のホテルでは住民全体を巻き込んだクリスマス会が毎年開かれていた。しかし、

◆島全体で見守る

団長の下廣幸将さん（42）は、子どもたちに楽しい思い出を届きたいと語る。大人に



島根県隠岐郡知夫村

なったときに「あれは楽しかったな」と思い出せる体験を残したい。それが青年団復活の目的でもあり、島の大人たちの願いである。島を元気にするためには、子どもだけでなく働く現役世代共々楽しむことができる場が必要だと考え、2月には老若男女が参加できる企画の実施も検討している。

小さい島では、地元で生まれ育った者も外からきた者も、ここではみんなが顔見知りだ。青年団が灯したクリスマス会の明かりは、この島の未来を照らす光になっていく。

お問合せ：下廣幸将さん Mail: chibubentermaru1@gmail.com



西ノ島町のバスケットボールクラブに通う兄弟が日頃の練習の成果をスラムダンクの主題歌にあわせて披露した



クリスマスが題材のオリジナル演劇を披露した小学生たち

村に新たなにぎわいを

青年団が育てるフードフェス

（青森県三戸郡新郷村）

昨年、11月2日、青森県新郷村の金ヶ沢農村公園で村青年団「笑志」（以下、青年団）が主催するキッチンカーフェス「FOODIES MARKET SHINGO」が開催された。村内外から飲食店が出店し、会場は多くの人でにぎわいをみせた。青年団もブースを構え、ピーズアクセサリーづく

りやお菓子釣りなど、子ども向けの企画を用意した。

このイベントは団員の発案で2022年に始まり、今年で3回目を迎えた。徐々にイベントとしての実績が認められ、出店者の選択肢が増え始めている。出店者との調整、会場づくり、広報。団員それぞれが得意分野をいかし、役割を担う。チャリンのデザインが得意な団員は、育児の合間を縫って制作を引き受けた。チャリンをつくる時間が適度な息抜きとなった。



当日は村内外から7店舗が出店した

野をいかし、役割を担う。チャリンのデザインが得意な団員は、育児の合間を縫って制作を引き受けた。チャリンをつくる時間が適度な息抜きとなった。



青森県三戸郡新郷村

いるそうだ。

青年団の団員は約20名。役場職員だけでなく、地域おこし協力隊や村内事業所で働く若者など顔ぶれは多彩だ。村内の道端でゴミを拾って回るクリーンウォークやふるさとまつりへの出店など、活動は幅広い。近年は地域の他団体からイベントへの協力依頼等、声がかかる機会も増えた。活動を重ねるなかで彼らが築いてきた信頼の証ではないだろうか。無理なく、でも着実に。村の若者たちが育む信頼の輪は、少しずつ広がっている。



お問合せ：Instagramで「新郷村青年団」と検索

地元への企画輸入

親になることを視野に楽しみ学ぶ

（沖縄県石垣市）

11月2日～3日にかけて、宮良青年会

は防災サバイバルキャンプを実施した。石垣島は自然が豊かな一方、漂着ごみやハブなど危険動物の課題を抱える。また青年会を卒業する若者は子育て世代となる。親として学ばなければならないことも視野に、実践の場として本事業が企画された。当日は海水を沸騰させて作った塩で食物を味付けしたほか、応急手当を体験した。さらに漂着ごみを活用した筏づくりにも挑戦し、海上で4m



筏づくりを通じ大人と子どもが本気で楽しみ学ぶ

海上で4m



沖縄県石垣市

進んだなど、大人が本気で遊び学んだ。

この経験をふまえ、後日地元スポーツ少年団向けに同様の事業を実施、定員丁度の20名もの参加を得、子どもの顔に喜びが溢れた。生きる力を育むと同時に、青年会の存在を知る機会ともなった。他地域の状況に学び、社会情勢も見据えつつ自分たちの強みを分析し、誰のために何をするか。一言で表すのは簡単だが、実現できるかどうかが社会に存在感を発揮できるかを決める。石垣島の青年たちは、これを見事に成し遂げた。

お問合せ：石垣市青年団協議会 Mail: homerun.hit2000@gmail.com 本事業の詳細は日本青年団協議会noteも参照



地域活動ラボ

地域青年による活動はその多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、人間関係の応答をとおして自分のできることが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に携わった審査員自らが分析し、活動の社会的意義を明らかにしていく。昨年から始まった新連載「地域活動ラボ」。第10回目となる今回は、岡山県岡山市を拠点に活動する「岡山県青年団協議会」の「令和6年能登半島地震現地ボランティア活動」について紹介する。

2024年度全国地域青年「実践大賞」

審査員 萩原 建次郎 氏

（駒澤大学総合教育研究部
教職課程部門教授）

【取り組み概要】

2024年1月1日に発生した能登半島地震の発生後、岡山県青年団協議会では自分たちで何かできることがないか模索した。

どこから動けばよいのか悩み、倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会に相談をした。すると「まずは現地を見た方がよい」というアドバイスを受け、同年4月に能登半島の震災被害の視察に行くことに。現地の状況とそこでの実感を元に、相手に迷惑のかわらない形で、かつ自分たちがやりたいことを検討した。その結果、支援ボランティアを現地に派遣する8月に3泊4日のバス企画に行きついた。

実行委員会を立ち上げ、具体的な活動計画準備、派遣資金、支援金集めなどを行った。事前研修会では、日本赤十字職員を講師に「ボランティアの心構え」「応急措置演習」も実施。現地では被害の大きかった輪島市、珠洲市を中心に活動。廃材撤去や屋内片付け、地域行事への出店、避難所での炊き出し、避難所訪問などを行った。ボランティアには地元大学生、高校生、社会人、青年団員、26名が岡山から参加。主催者のほか、石川県青年団協議会、バックアップメンバーを加え、38名での

実施であった。

地元に戻った翌月には報告会を実施。ボランティアで得たことや気づいたこと、今後の課題も整理した。外部講師に災害NGOの方も招き、地震が起きた時にすべきこと、起きた時のために自分たちができることをテーマにグループワークも実施した。

【解説】

岡山県青年団協議会の実践の社会的意義

◆青年団という「顔」があるからこそ

個人の限界を超えられる

今回、地元のチャリティー企画への参加や災害支援団体の助言を得たことが、一歩踏み出す重要な契機となっていました。大きな社会課題に直面した時、私たちは個人の力ではどこからどう動けばよいかわからず、仲間といふ組織と仲間がいて、社会的な「顔」があることでさまざまな社会組織や団体とつながることができる。これはとくに若者年代にとつて大きな強みです。

◆現地ニーズに基づく発想

能登半島地震発生後、早期に現地視察を行い、被災地の状況を肌で感じられたことは、その後の活動方針を決定する上で非常に重要だったと感じます。単に「何かしたい」という思いだけでなく、「相手に迷惑をかけず、自分たちができること」という視点を持たれた点が素晴らしいです。これは、災害支援におけるボランティアの心構えとして最も大切な

な知識と視点をもたらし、参加者の理解を深める良い機会になったはずで

◆振り返りと学びが開く未来

ボランティアで得たことや気づいたこと、今後の課題を整理して報告されたことは、このような支援活動を継続・発展させていく上で不可欠なプロセスです。今回の経験を活かし、次なる災害支援や地域防災の取り組みへとつなげていく貴団体の姿勢に、大きな期待を抱きます。

●お問い合わせ

Instagramにて「岡山県青年団協議会」と検索 QRコードはこちら↓



事前に現地視察を行い石川県青年団協議会と連携する

月刊 社会教育

創刊1957年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎月幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。

定価：本体741円＋税

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町544 中川ビル4F
TEL03-5579-8973 FAX03-5579-8975 http://www.junposha.com/

日本青年館ホール

検索

「日本青年館ホール」で検索、もしくは右記QRコードよりお読み取りください。



〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4番1号
TEL03-6447-5660
ACCESS：東京メトロ銀座線 外苑前駅2b出口より徒歩5分



私たちは日本の社会教育と全国の青年団を応援しています。

12～2月の日青協の動き 日韓青少年指導者交流事業



この間の日青協役員の動きを、紙面をお借りして読者の皆様にご報告いたします。よりリアルタイムな情報は、日青協公式Instagramにて発信しておりますので、併せてご覧ください。フォローお待ちしております。

12月3日から6日にかけて、韓国ソウル市および京畿道坡州地区で日韓青少年指導者交流事業を実施し、杉山会長と棚田事務局長が訪韓した。韓国では国策として青少年育成が進められており、9、24歳を対象に全国約360の施設が無料で運営され、主に共働き家庭の放課後の居場所として機能している。複数の学校外の人間関係が育まれていく点も特徴的であった。各施設には最新設備が整い、スマートフォン依存への専門的ケアも導入されていた。あわせて戦争記念館やDMZを訪れ、朝鮮半島の歴史理解を深めた。

魅力発掘

もっと
知りたい！

知夫村青年団

◆知夫村青年団

知夫村青年団は、島根県隠岐郡知夫村を拠点に活動する青年団である。かつて島の祭りやイベントを担っていた旧青年団は、20年ほど前に自然消滅していた。現在の団員は約60名で、大人の島留学やタータンで移住してきたメンバーも多く所属する。

きっかけは、コロナ禍明けに抱いた危機感だった。近年、島には移住者が増えている。彼らが島のために汗を流す姿を見て、地元出身者の胸に問いが浮かんだ。「俺たちはこのままでいいのだろうか」と考えた有志5名が集まり、青年団の結成を決意した。

しかし復活には逆風もあった。旧青年団を経験した大人たちから反対されたのである。長年村の行事を担ってきた彼らには、重責から解放された安堵感もあった。下廣団長らは「先輩たちの手は煩わせない」と押し切り、結成に踏み切った。子どもの頃、当時の青年団がつくってくれた楽しい時間。その背中を手本に、今度は自分たちが届ける番である。

団員たちは仕事の忙しさや家庭の状況に応じて、参加できるタイミングで活動に関わる。仕事も家庭も青年団も、無理なくバランスをとる。おかげで活動を苦に感じたことはないという。令和の時代にふさわしい、新しい青年団のかたちがここにある。

◆活動紹介「途絶えた祭りを自分たちの手で」

青年団は24年の復活以降、途絶えていた島の祭りを次々とよみがえらせてきた。

春には、知夫小中学校のグラウンドで野だいこん祭りを開催した。この祭りは、かつての青年団が長年取り組んできた、山開きを祝う春の風物詩。6年ぶりの復活となった今回は、有志による隠岐民謡や踊りが披露され、屋台も立ち並んだ。

夏には、お盆の夜空に約200発の花火が打ち上がった。25回目を迎えた知夫村花火大会である。盆期間中は帰省者で島の人口が約2千人に膨れ上がる。「島外にいる孫にも花火を見せたい」という声に応え、お盆開催にこだわってきたが、花火業者が繁忙期に来島できず、開催が危ぶまれた。そこで団員らが自ら講習を受け、打ち上げ技術を習得。住民からの寄付を元手に、自分たちの手で花火大会を成功させた。途絶えた行事を嘆くのではなく、どうすればできるかを考える。その姿勢が青年団の活動を支えている。



打ち上げ花火の仕掛けも自分たちで行った

◆地域のこと

知夫里島は、隠岐諸島の島前地域に位置する周囲約27kmの島だ。コンビニも信号機もなく、散策中は人よりも牛やタヌキに出会う機会が多い。島前カルデラを一望できる赤ハゲ山や、火山の噴火跡がむき出しになった赤壁など、小さな島とは思えない雄大な自然が広がる。島では大人全体で子どもを見守る文化が根づいている。下廣団長によれば、誰かが抱っこしている子が、その人自身の子どもとは限らないという。家族の枠を越え、島全体が一つの大きな家族のようだ。

最後に、クリスマス会でも腕を振るった島のグルメを紹介したい。来居港の目の前にある「ニューポート」は、知夫里島黒毛和牛を使用した特製カツ丼が名物だ。数年前に移住してきたシェフが営む古民家フレンチ「Chez Sawa」では、島の特産品をふんだんに使った料理が味わえる。そして島唯一のお菓子屋さん「めいーでーる」。季節の果物を使ったケーキが人気で、来居港の売店でも購入できるレモンケーキはお土産にもおすすめである。



クリスマス会で振る舞われた料理の一部。サーモンのカルパッチョやブルスケッタ、味の沁みたおでんは冷えた体にぴったり

前号よりスタートした新企画「魅力発掘」。

2ページのActionにて取り上げた実践を行う青年団の活動やその活動地域を深掘り、その魅力を紹介する企画です。

第2回となる今回は、島根県隠岐郡知夫村を拠点に活動する知夫村青年団の魅力を発掘します！！



前号から始まったみなさんの想いや考え方を交換する新企画。

どなたでも投稿できる掲示板です。投稿する内容はちょっとしたことでOK！

新聞への感想、事業の告知・報告、日頃考えていることや悩み、ちょっと誰かに

伝えたいことなどなど、なんでもお寄せください！

滋賀県にて青年団教宣コンクールを開催♪

1月18日（日）に第40回滋賀県青年団教宣コンクールを開催しました。教宣活動を大切にしていきたいという思いから続いている本事業。今回は初めて審査会の場に市町の青年団員が立ち合い、審査員に自分の言葉で作品に込めた熱い想いを伝えてくれていました。教宣活動にかけたい想いが「波紋」として広がり、今回の教宣活動の取組が今後の青年団活動に生かされ、「波紋」として広がっていけば嬉しいかと願っています。（滋賀県・滋賀県青年団体連合会・富長 弘宣・30代）

*編集部注：確かな情報を伝えることで理解と判断の土台を上げ、対話から人々の考えを見える化し、活動や生活の視野、さらには関係性を広げていく取組のこと



宮城県青年問題研究集会を行いました！

1月17日・18日、宮城県青年問題研究集会を開催しました。

初日は日本青年団協議会元会長の中國謙二さんを講師に招いた講演に加え、体験研修としてeスポーツ大会を実施。食事を交えた交流も大いに深まりました。

2日目は2グループに分かれて分科会を行い、それぞれの悩みや課題を共有。今後の活動に向けたモチベーションが向上する、実りの多い時間となりました。

（宮城県・富谷市青年団・長 煌晟・20代）



Youth 掲示板投稿募集♪

投稿はどなたでも可能です！

右記二次元コードからぜひ

お寄せください。

皆さんの投稿をお待ちして

おります！



平和活動のあるべき姿

若者に伝えるべきは、平和を「願う」ことではない。争いを生む自己欺瞞を排し、理性を鍛錬することだ。平和とは、規律ある知性発揮の産物である。

（奈良県・無所属・大淀 仰理・30代）



2025 年度も残すところ 2 カ月、新年の浮ついた空気はもはや消えた。自分たちの活動と方針を照らし合わせ、言い訳せず自己点検を行う時が来ている。何ができたか、なぜできなかったか——良くも悪くも積みあがった実績から目を背けることは、この間の自分たちの努力を否定することに等しい。

青年団活動において重要な要素の一つは、地域貢献（社会貢献）である。団体が長く続く理由があるとすれば、それは役割を自覚して行動してきた結果、社会から認められてきた経過があるため。団員らの「自分たちが楽しいと思える活動を」という言葉は、活動の延長線上に地域社会からの重い期待があるという不条理を、誰よりも理解しているからこそ出る覚悟の裏返しではないか。

しかし、自分さえ楽しければいい、という理屈では組織は長続きしない。できないことが罪ではないが、自らの甘えや弱さを棚上げし、見えもしない高みを仰ぎ、誰かが運んでくる「魔法の解決策」を夢見る。その甘えが、組織を内側から腐らせるのだ。

自らに信を問い続けることが肝要だ。活動は仕事ではないため、見過ごす選択もできる。人が引き付けられるのは、自ら進み、迷い、壁にぶつかりながらも進む姿である。そこで求められているのは、自分自身が常に初心を忘れず、本質を見つめ続けようとする姿勢だ。等身大を忘れた虚勢は、仲間や地域にとって苦痛でしかない。まずは地に足のついた学びと取組を称え合い、嘘のない歩みを始めよう。

若者は
なんでもできる



世界遺産のある五箇山に都会から移住した愛らしい若者がいる。名は長岡悟さん。出身は埼玉県で、学生時代に東京都武蔵野市のセカンドスクール事業で訪れたのがきっかけである。その時都会にはない人とのつながりを肌で感じ、「不便とも思える環境でもたくましく生きられる起因は何か」と考えたという。そして令和2年、富山県南砺市の旧利賀村（五箇山地域）に移り住んだ。旧利賀村は標高1000mの山々に囲



人とのつながりこそ
「地域活性」

長岡 悟さん（28）

（利賀村青年団、

五箇山連合青年団）

まれた人口約400人ほどの山村過疎地域。長岡さんはすぐ青年団に入った。「つながりが本場に濃いので、ここに集まった若者がもっと自由に気楽に活動できる地域にしたい」と話す。また、暮らしていくうちに「不便さ」が逆に「たくましさ」や「力強さ」の源になっていると感じる」という。

「交流人口の増加は着実な地域活性につながる。たくましく生きる長岡さんを軸に、その輪は今後さらに広がっていくだろう。」

●森井 勇真（日本青年団協議会執行理事）より投稿

編集後記

並の人間よりも AI の方が優秀と言われる時代となった。世界中の知見を活用できる AI は、「素人の意見」の意味を喪失させていくだろう。では、その時代に私たち普通の人は何をするのか。また AI の判断に全て任せようとする人間を、果たして人間と呼んでいいものか。人間とは一体何なのか。「最後は人間対人間だから」という根拠ない言説を、批判的（≠否定的）に捉え直す時代が来ているように感じる。（ひ）



最新の情報は
こちら

<https://www.facebook.com/nisseikyo01/>



れこめんど

あまり知られていないすてきな場所や食べ物…地元のおすすめを青年団のエピソードも交えてご紹介します。

瀬戸内海に浮かぶ小豆島は、オリーブや醤油、穏やかな海と歴史が息づく、人と自然が近い島です。市町村合併により平成 18 年 3 月に「小豆島町青年団」へ統合し、これまでの活動も継続しています。中でも「寒霞溪クリーンハイキング」は 30 年以上続く事業で、毎年 11 月下旬に登山道表 12 景を登り、裏 8 登を下り、紅葉を楽しみながらゴミ拾いをしています。続けてきた中で、ゴミの量が段々と減ってきました。寒霞溪は国定公園第 1 号に認定されており、貴重な文化財で、紅葉シーズンは絶景です。四季折々の魅力を持つ小豆島。その魅力をこれからも青年団活動を通して発信していきます。



●西川 佳子（香川県連合青年会・日本青年団協議会執行理事）より投稿